

古き青年

П.Наранбаяр⁹⁹ орчуулав

田舎の様子は何かの変哲もないが、時勢は混乱の中。砂地における泉や灌木のある谷あいによって時折古びたゲルから煙が立つ。四方八方は荒涼として白い霞が漂う。真夏の灼熱がフェルトのゲルを容赦なく照らし、牧民の苛立ちを誘う。ゲルの近辺には牛の糞。子牛の群れがあたりを走りまわる。人々は物心がつく頃から白髪になるまで一本の川沿いを上流から下流へ、下流から上流へ移動し、一つの井戸の周りを転々と遊牧しながらこの世を去る。

ジャンバル僧が上座に座り、経典について無駄口をたたき、ナムジル官吏が他所から来て、法規の嘘交じりの話をするのを聞くうちに月日が経つ。遠方の山を越えれば人家無し、地平線の外に大地無し、と考えるうちに万機を逃がし、世界文明から振るい落とされる。朝は仏を、夕方は天を拝みながらその一生は黒霧の中で終焉する。

古き青年は赤毛の馬に乗って小走りで駆けてきた。白い布を頭に巻いている。絡み合ったぼさぼさした黒い弁髪の数本の髪が頬に垂れている。汚れで真っ黒になったぼろぼろのデールの袖をわきの下に挟み、ひびのある黒ずんだ肘を露出させている。びしっと馬を下り、手際よく馬をつなぎ、土まみれになった前すそで日焼けした顔汗を拭いて、無造作に鼻をかんでからゲルに入った。

「バルダン家はフェルトを作っている。ツェンド家は羊を塩沢地に放牧させている。ダンバは馬探しに出た。ゴンボはハンガイへ行って帰ってきた。」などのたわいもない話で目上の人に油を売り、僧侶から目をそらし、官吏の前で小声で喋りながらストーブの近くに座り込む。奥さん方にヨーグルト一杯とミルクのおこげをいただいてそこを出た。それから、金持ちのバルジル家の馬乳搾りを手伝って、馬乳酒にありついて昼を過ごす。その後は、デンデブ貴人のところで羊を屠って内臓の煮込みを食べて一晩を過ごす。

古き青年は賢い者だが、東旗の境に行ったこともなければ、西の川の向こうに渡ったこともない。半径三つ四つ駅に相当するところのみにおいて生活してきたせいでそれ以上見聞を広めることもできなかった。

歳は若い、無一文の孤児で、村の各家に雇われ、人間らしき暮らしの道を早くに見失っている。厳冬の寒さを馬の番をして過ごし、真夏の暑さを羊の番をして乗り越えるが、秋に冬眠し、春に巢穴から出るプレリードッグより苦難な時を生きる。祖

99 “Шинэ Монгол” бүрэн дунд сургуулийн гүйцэтгэх захирал

先や年寄りの言葉以外に真実はないとし、春夏秋冬を営む場所以外に行くところもないと考え、まるで逆さまにした鍋の中の如き未開な田舎暮らしにつつまれて育つ。

何と可哀想で野蛮な人生、何と惜しい青春期、何ゆえ新しい世界を求めないのか。憂うべきこの状況が古き青年にわかるはずもない。封建領主、ラマたちの悪事を認識できようもない。成り行きに流されるがままに苦しみは幸福となり、野蛮は娯楽となった。皆一地方一国をあげて古き青年如き目をつぶり、耳を塞ぎ、世の中を見知ろうともせずに、無知のまま草原に取り残された。

何と惜しいこと、何と可哀想なこと。

ところが、古き青年のある友人が革命の火蓋を切った日から逆さまの鍋の中に光が差し、一国は目を覚ました。天の遥かかなたに大地があることがわかり、五大陸や五つの大海の存在を知り、新世界と歩みを共にしはじめた。

青きモンゴルは赤きモンゴルに変わった。

古き青年は新しき青年に変わった。

何と幸運なこと、何と嬉しいこと。